



夏の只見川岸边 金山町・大志 2016年



冬の只見川岸边 金山町・大志 2017年

うつわの目 ―榎本千賀子の写真

大倉 宏 (砂丘館館長・美術評論家)

角田勝之助の写真に、いかに私が揺さぶられたかについては、書いたことがある。

その角田が生まれ、育ち、写真を撮り続けてきた金山に、去年(2016年)榎本千賀子に移り住み、撮影した写真と、角田の写真が並列された今回の展覧会のポスターおよびチラシを見て、まるで2つの手が会って、音を立てているようだと感じた。

幼い頃から育った東京の住宅地を歩き、撮った榎本の白黒の写真に惹かれて、新潟絵屋での個展を企画したのが3年前――榎本が新潟に転居してきた翌年で、その次の年には彼女が新潟で撮った新作の個展を開いた。そこには住宅地である青山や小針の光景と、そこから地続きの葦の茂る信濃川べりや、まばらな灌木がやぶのようになった海岸の一角が写されていた。このときから榎本の写真はカラーになったが、今回の金山の写真もカラーで、新潟大学地域映像アーカイブ研究センターによる角田の写真を年代順で紹介していく展示の4回目でもある本展に並ぶ角田の写真も、はじめてカラーになった。1950-70年代の、一般にもカラーフィルムが普及しはじめた時期の角田の写真ということになる。

角田と榎本。写真を撮る人間としては、根本的にふたりは違っている。角田の興味の対象はカメラを手にした瞬間から、あるいはそれ以前から、人だった。その写真に迎えられた人間たちから広がる村世界の広さに、私は感銘を受ける。

一方榎本の東京・新潟の写真には、身体としての人の影が



商店前に展開していたホースたち 金山町・川口 2017年

ENOMOTO Chikako 1981年東京出身。2005年「DAEDALUS」MUSEE F(東京)より写真家として活動。自らが暮らす環境を対象として、写真を通じた探索を重ねてきた。2013年より新潟大学地域映像アーカイブセンターに参加し、角田勝之助の映像資料の整理および「村の肖像」展シリーズの構成に携わる。2016年5月末、金山町に移住し、町内で自らの制作と町内に残る写真資料の整理を行う。2013-2016年新潟大学助教。現在、新潟大学研究員および金山町臨時職員。



左上から ダム浚渫作業場入り口のポール 金山町・越川 2016年 / サイノカミの準備にいそむむひとびと 金山町・大志 2017年 / 畑のパイプにかかっていたビニールシート 金山町・大志 2017年 / 大志の家々をめぐる柳津から来た神楽の一行 金山町・大志 2016年 / 春の雪で作ったトンネルを見せてくれた少年 金山町・川口 2017年 / 只見川に落ちていた残雪 金山町・大志 2017年 / 雷神様の祭りに集まったひとびと 金山町・大志 2016年 / 冬の只見川に注ぐ湯倉温泉 金山町・本名 2017年

一切ない。人の像が枠内に入り込むことで、乱さずにいないものを、そのままに定着しようとする揺るがぬ決意のようなものを見る毎に感じてきた。

その榎本が金山で撮影した写真群に、初めて人が登場する。そして、人を通じて村を見つめてきた角田の写真と接触する。

榎本千賀子は2013年から3年間新潟大学に在籍し、地域映像アーカイブ研究センターによる角田の写真の整理、紹介作業に中心的な役割を果たしてきた。現在は金山町の臨時職員として、村に残された写真や映像記録の調査、整理の仕事に関わっている。角田と金山への関心の程度は、生業としての仕事の範疇を明らかにはみだしている。

角田の写真世界が、写された人間から広がる、共同体とその向こうに広がる世界の奥行きを生成するのに対して、その角田と53歳の年齢差のある榎本の写真は、環境の側の視点から、その環境／場所に形作られている「私」を見つめる写真だ。自分も一時期暮らした日本の新興住宅地に、観念的嫌悪を育ててしまった私が、榎本の住宅地写真に接し、動かされたのは、「ここが私だ」と言う、やわらかく、毅然とした不思議なく場所の声の力によってだった。私とその一部でありたくない願う場所が、寡黙に私を見つめ、「ここはあなただ」と言う。場所は人間世界を容れるうつわだが、そのうつわと「私」の決定的な切断を、角田と榎本のちょうど中間世代である私は身に刻んでき

たのに、榎本の写真の前に立つ一瞬だけ、その亀裂が失われる――長年のこわばりから放たれる心地を覚えて、動揺したのだった。

角田の写真は、私が1970年代の首都圏郊外に移住する前、小学校時代の幾年かを過ごし、閉山とダム建設によって姿を消した新潟県の鮎山集落で過ごした時空の感触をよみがえらせる。

その集落とは異なり、今も継続する世界としてあり続ける金山に、榎本が暮らしながら撮った近作は、そこにいる人々の姿を含め、「うつわの目」が榎本という鏡に「環境という私」を映した像であり、角田勝之助の写真という右手を拍つ、美しい左手の形をしている。■